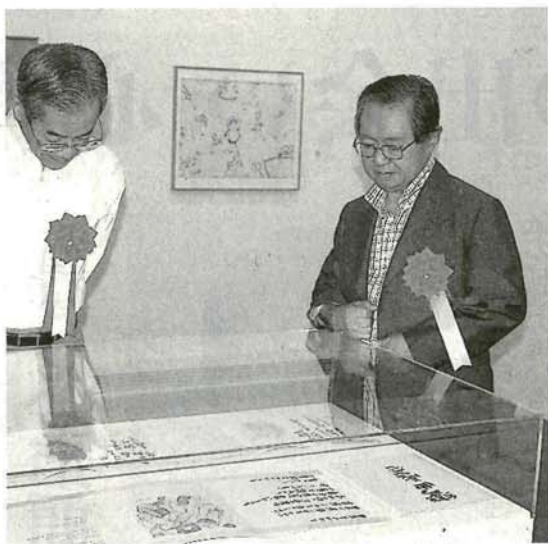


詩人・大岡信さん死去

故郷に追憶・悼む声

5日に86歳で亡くなった詩人の大岡信さんは三島市出身で、県立沼津東高校の前身、旧制沼津中学校から旧制第一高校、東京大学に進み、文学を学んだ。ふるさと三島には2009年、作品などを展示した「大岡信ことば館」が開館。同じ年から、大岡さんは裾野市の自宅で闘病生活を送っていた。県内の関係者からは悼む声が相次いだ。



石川嘉延知事(当時)と一緒に、自身のコレクション展の作品を見る大岡信さん(右)
=2006年、静岡市駿河区のグランシップ

「ことば館の館長で造形家の岩本圭司さん(60)は、2月に大岡さん宅を訪ねたの

が最後になったという。「弱っておられ、言葉は発せられなかったが、『また

遊びに来ました』と云うとうなずいてくださった。仕事をすることはできなくても生きていてくださるだけで甘えさせてもらえた。シヨックです」と語った。通信教育のZ会が館の設立に着手した07年、大岡さん本人とともに準備委員会に加わった。開館後も、大岡さんは運営に携わってきたという。「大岡さんは文学にとどまらず、美術や音楽ともことばを通じてコミュニケーションした。万葉集から現代までの時代、文学、ことばを俯瞰して見ることができ、入り口も出口も閉じていない筒のよう。日本の文学全体を語ることができる数少ない大きな存在だった」

館には「大岡信の部屋」があり、大岡さんの自筆原稿や美術品のコレクション

を展示している。「まだ今後のことは決められないが、今までは違う役割を果たさなければこの思いはある」と話した。

Z会顧問の加藤丈夫さん(68)は「芸術全般に造詣が深く、交友関係も広かった。好奇心が旺盛で話題も豊富。周囲には人の輪ができて途切れなかった」と振り返った。

環境保全などの活動を通じて交流があったNPO法人グラウンドワーク三島

(GW)の渡辺豊博専務理事(66)は、かつてのよさから大岡さんに「ジャンボ」の愛称で呼ばれていた。

法人立ち上げ前に居酒屋で話した時には、「水というの人間でいう血液だ。血液が汚れば人間の心も汚れる。富士山も同じだ」「企業や行政にも様々な意見がある。一方の意見だけでなく、大きな視点を持ったパートナーシップが大事だ」と教わった。「あの時

の言葉がGWの活動理念の礎です」

最後に会ったのは2年前の9月、三島のすし店。脳梗塞の影響でうまくしゃべれない大岡さんだったが、「ジャンボ、頑張れよ。頑張り続けろよ」と力強く握手されたという。

大岡さんの母校、沼津東高の勝又津久志校長は「卒業生として在校生に温かい言葉を頂いた。子どもたちはそれぞれ、これからの歩みの支えとしていっているのではないか」と話した。同校には大岡さんが21歳の時に作った詩「春のために」の1節を、本人の揮毫を元にして入れた詩碑がある。「ぼくらの 視野の中心に しぶきをあげて 回転する金の太陽」。1992年の除幕式には大岡さん夫妻が同席し、生徒たちと除幕したという。

大岡さんは三島の名誉市民でもある。豊岡武士市長は「『文芸三島』では、昭和53年の創刊から昨年発行の39号まで、毎回寄稿していただいております。多くの人に愛された大岡先生をしのび、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます」とコメントした。